

# 小学校英語教育における音声指導についての予備的研究

戸谷 敦子

広島都市学園大学 子ども教育学部

## 要 旨

本稿は、小学校での外国語活動及び外国語のなかの音声指導に着目し、関連の文献を分析することで、その留意点や指導の可能性について検討した。現行及び次期学習指導要領とも、小学校では「音声」に慣れ親しむことを導入に据えている。研究では、フォニックスを用いた音声指導に着目し、その有効性や日本での可能性について調査した。

**キーワード：**小学校外国語活動，英語科教育，音声教授法，フォニックス，

## はじめに

小学校での英語教育の全面実施まであと2年となった。2020年度以降、英語教育は、大学での必修外国語の2年間を加えれば12年続くことになる。その導入期を担う「初等英語」の役割は大きい。教員陣には語学教育に関する確かな力量が問われる。しかし、多くの学校では教科専任制ではなく、該当学年の担任が主体となっていくことから、英語が苦手な教員には戸惑いもあると思われる。特に、日本語とは異なる英語の音声の聞き取りや発音の指導には、ネイティブスピーカーでないゆえに、工夫を必要とする分野である。なぜなら大学受験、地域によっては教員採用試験で出題される英語の試験問題は文法知識や文章読解力を問うものが中心であり、小学校教員自身もそれらを主軸とした英語教育を受けてきたからである。

本研究は、小学校で始まる英語教育のなかの音声指導について取り上げ、その有効な教授方法としてフォニックスを用いた指導に着目し、小学校での実施の妥当性や可能性等について先行研究を援用しながら検討していく。

## 1. 学習指導要領のなかの「音声」指導

この章では、学習指導要領の中で、「音声」がどのように扱われているか、また、現行の学習指導要領「外国語活動」と次期の「外国語活動」及び「外国語」では、音声指導にどのような変化がみられるかについて概説する。

文部科学省が平成29年3月に公示した次期学習指導要領によると、小学校英語教育の大きな改訂点は、①これまで高学年で行われていた「外国語活動」は中学年から開始となり、②高学年では正規の教育科目としての「外国語科」が導入されることである。授業時間はそれぞれ、3、4学年の「外国語活動」が年間35時間、5、6学年の「外国語科」が70時間となる。また、「小・中・高等学校一貫した学びを重視し、外国語能力の向上を図

る目標を設定する」とされている。

現在5、6学年で実施の「外国語活動」の学習指導要領では、英語の音声指導について、第2項目である「内容」と第3項目の「指導計画の作成と内容の取扱い」の中で短く言及されている。「内容」では、第2の(1)においては、「外国語の音声やリズムに慣れ親しむ」、「日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと」とされている。「指導計画の作成と内容の取扱い」では、もう少し具体的となり、第1の(6)で「音声を取り扱う場合には、CD、DVDなどの視聴覚教材を積極的に活動すること」とされ、第2の(1)イにおいて、「外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなど文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いる」とされている。要するに、小学校では英語の音声に慣れ親しむことが学習の優先事項であり、英語を母語としない日本人教員はCDやDVDを活用し、児童に正確な英語音声に触れる機会を与えることが大切で、アルファベットや文字の学習は児童の負担にならないよう、補助的に活用すると解釈できる。

では、これまでの高学年の外国語活動において、「音声」に慣れ親しむ成果がでているであろうか。この点について、文部科学省は「小学校学習指導要領解説外国語編」(2017)のなかで、課題を明記している。同書の第2章「外国語科の目標及び内容」において、「音声中心で学んだことが、中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない」、「日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において問題がある」と指摘している(第2章11～12頁)。つまり、「音声」に慣れ親しむ、日本語との違いに気付くことがまだ不十分なのか、それとも「音声」から「読むこと」、「書くこと」にうまくつなげていくことが出来ていないのか、もしくはその両方ともに問題があることが示唆される。

では、この状況を受けて、次期学習指導要領はどのような対策を打ち出しているのだろうか。まず、第4章「外国語活動」では、「音声」に関する記述は、第1項目である「目標」に初めて出現し、第2項目の「各言語の目標及び内容」において短く言及されている。特記すべきは、「目標」の(1)において、「(前略)～、日本語と外国語との音声の違い等に気が付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする」となっている。現行と次期を比較すると、現行では「慣れ親しむ」とともに「違いを知る」のプロセスを提示しているのに対し、次期においては、「違いに気付く」とともに「慣れ親しむ」ようにと、順番を入れ替えていることが解る。つまり、まずは音声の違い等に気づき、その違いに慣れ親しんでいくことを求めている。現行では「アウトプット」に設定していた「気づくこと」を、音声指導の入り口に据えた事は、学習の到達目標を引き上げたと言える。

次に、高学年対象の第2章10節「外国語」では、音声指導について更に具体的な言及が行われている。まず、第1項「目標」の最初の(1)において「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気づき、これらの知識を理解するとともに、読むこと書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話す

こと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身につけるようにする」とする。つまり、既述の「音声から文字の学習に円滑に接続されていない」という現状課題に、次期では高学年で取り組む方針が明記されている。

では、どのように取り組むべきなのか。現場の担当教員は何に留意して「音声」に慣れ親しませるのか、その方向性や策を知りたいであろう。音声指導に関して、最も言及されている箇所は、第2項「各言語の目標及び内容等」の2の(1)のア「音声」で挙げられる5つの留意点と、同じく第2項の3の(2)のイの部分に記された指導上の配慮事項である。2つを要約すると、音声指導においては、日本語との違いに留意しながら発音練習などを通して、(ア)現代の標準的な発音、(イ)語と語の連結による音の変化、(ウ)語や句、文における基本的な強勢、(エ)文における基本的なイントネーション、(オ)文における基本的な区切り、を指導していくこと、また、音声と文字とを関連付けて指導することが求められている。音声指導に関して、「何を」「どのようにして」と現場から問いかけがあるとするなら、「何を」の部分はある程度明確であるが、「どのようにして」の外国語指導の方法論の部分は、現場の裁量に大きく任されていると言える。

しかし、「学習指導要領」の関連文書には、豊富とは言えないものの、音声指導の留意点として、かなり具体的に言及された記述も見つけられる。学習指導要領「生きる力」Q&A「外国語活動・外国語に関すること」(文部科学省ホームページ)の「(中学校)問11-7」に対する「答え11-7」に見られる次の内容である。

『(前略)～、小学校でplay/pleɪ/やthank/θæŋk/などの音声に触れたあと、中学校では文字でどのように表すかを学ぶ際に、その両者を関連付けて指導することなどが考えられます。』

また、既述の「小学校学習指導要領解説外国語編」の43頁には、フォニックスを思わせる次のような記述もある。

『(前略)～、例えば'k'や't'が/k/や/t/と発音することを'koala'や'ten'などの簡単な語を使って音声に慣れ親しませた後、kやtで始まる思いつく単語をペアやグループで協力しながら制限時間内にできる限り多く言わせる活動などが考えられる。』

つまり、英語(多くの児童にとっては初めての外国語)では、文字(アルファベット)の名称としての発音(/keɪ/や/ti:/など)とは別に、語のなかで用いられる音もあるということに気付かせる狙いであるが、この導入方法は、耳が敏感な小学生の特性が活かせる教授法である。外国語には、日本語(多くの児童にとっては母語)にはない「文字」と「音」の関係があることを「体験」することは、児童にとって新鮮で興味深い異文化体験になるのではないだろうか。

この章では、「学習指導要領」における「音声」の位置づけとその変遷について概観した。小学校では、まず「音声」に慣れ親しむことが不可欠であり、その後の「読むこと」「書くこと」「話すこと」の基盤として位置づけられている。さらに、次期指導要領では、日本語と英語の「音声」の違いに気づき、その上で慣れ親しんでいくことが新たに求められ

ている。言語はコミュニケーションの単なるツールではなく、奥深い文化でもあり、英語学習は異文化学習とも言える。異文化理解がそう簡単ではないように、英語理解も容易だとは言い難いが、導入期の小学校では、児童にとって楽しく異文化への扉を開きたいものである。次章では、母語や外国語として英語を学習する国や地域で長らく採用されているフォニックスに着目し、先行研究からその有効性や妥当性、そして実践方法について検討したい。

## **2. フォニックスをめぐる討議**

### **(1) フォニックスとは**

フォニックスとは、英語で綴られた文字とその発音の間にある一定の規則性を用いて、文字の読み書きを容易にする方法である。アメリカでは、基礎教育の綴り方指導の際に用いられていたが、近年は外国からの移民のための英語教育にも援用されている。リーバー(2010)は、phonemic awareness(音素認識)理論に基づく音声教育は、読み書きの土台をつくるという大切な役割があると論じる。英語では常に綴り通りの発音になるとは限らないが、Abbott(2000)によると、英語の綴字法については、その75%以上が信頼できるようなルール群が存在すると主張する。実際に日本の中学校英語教科書を用いて検証した渋谷(2011)の研究では、教科書6冊のうち3冊以上で使用されている高頻度語の音の80%以上をフォニックスルールでカバーできることを明らかにしている。フォニックスを学習することは、教科書に出てくる英語を「聞くこと」、そして「読むこと」「綴ること」の手助けとなりうる。

### **(2) フォニックス学習の妥当性—政治経済的、発達心理的見地から—**

英語の習熟には重要な音声指導であるが、フォニックスも含む音声の学習について調査した太田(2012)の研究では、音声指導が適切に行われていない実態が指摘されている。調査結果では、英語学習者の87.9%が中学校において、84.8%が高等学校において音声に関する指導や音の規則性に関する授業を「受けていない」と回答している。一方で、早期英語学習のためのDVDや絵本など様々な教材が販売され、幼児英語教室も盛んである。常勤のネイティブ英語教員のいる小学校もある。2020年から小学校で評価を伴う英語教育が全面的に開始されることを考えれば、英語教育熱は更に進むであろう。英語の習熟度が、児童の家庭の社会経済的背景によって左右されることのないよう、英語能力の格差化を防ぐためにも、公立小学校でも適切な音声指導を可能にしなければならない。

音声指導の開始時期についてはどうであろうか。樋口ら(2005)は、外国語学習と脳の成長について論じる。子どもは9歳を境に左脳が右脳を凌いでいき大人に近づいていく、そのため外国語教育では「9歳の壁」と呼ばれる時期があり、その前と後では指導方法や教材を変化させる必要があると指摘する。個人差はあるが、それまでの直観的、本能的、秩序に無頓着な時代から、9歳以降は分析的、論理的、秩序立つ時代に入るのである。長

谷川（2011）は、「9歳の壁」以降の子どもの特徴を考慮すると、歌や踊りといった楽しさ優先の活動よりも知的好奇心を喚起できる指導法が適切であると説く。9歳は小学校3年生の時期、つまり小学校の英語教育が始まる時期であり、知的な興味関心を導く指導方法をとることが求められる。

また、言語の習得には、臨界期仮説（critical period hypotheses）（Penfield他 1959）がある。これは、臨界期とよばれる年齢を過ぎると言語の習得が不可能になるという仮説である。Dekeyserら（2005）は、第2言語学習能力にも臨界期があり、母語話者並みの到達には早い開始が有効と説くが、それは自然な学習（naturalistic learning）にのみ適応されると指摘する。小学校の子どもたちは、ふだんは日本語環境のなかで生活し学習している。発達段階を考慮しつつ、「音声」の識別に敏感でインプットにも柔軟な時期に、外国語音声に親しみ、母語と混乱することなく、興味深く比較・発見を楽しめることが望ましい。

Piaget（1973）の思考発達段階説によると、小学校の7歳から12歳ぐらいまでは具体的操作期にあたり、具体的な問題について論理的に考えることが出来る。外国語学習について言えば、聞きなれない外国語音声音を音素のレベルで識別するような学習は可能である。母語が定着した成人よりも、柔軟に聞き、発音してみることも可能であろう。12歳以降は形式的操作期にあたり、形式的、抽象的操作が可能になる。小学校6年生くらいだと、仮説演繹的思考ができるということで、一般原理から事象について推測するような学習が可能になる。フォニックスのルールを学習し、そこから新出語彙の発音を推測したり、聞き取った語彙の綴りを推測したりすることも可能となる。山見（2016）は、フォニックスの指導実践から、小学校5、6年生はアルファベット文字の読み書きや、文字と音との関係を学ぶのに効果的な年齢であり、フォニックス指導に適していると報告している。

### （3）フォニックス指導の実践について

フォニックスは既述のように、本来は英語を母語とする子どもたちの綴り方（spelling）指導の際に使われていた。子どもたちは学校に入る前に、すでに多くの語彙を聞き分け、それを発音（使用）できる。あとはその綴り方を学習する際にフォニックスを活用するのである。フォニックスのルールを活用すれば、文章を読むこと（reading）にも助けとなる。英語学習には大変有効な指導法であるが、日本の児童の場合、英語を外国語として学ぶので、指導上の工夫が必要である。Synthetic phonicsの手法を用いた山見（2016）の例は、アルファベット表から始まり、アルファベット3文字単語カードや3文字単語のビンゴゲームを用いて、小学校5、6年生に知的に楽しくフォニックスを指導している。

英語圏でのフォニックス指導法の援用について提示するScott（2018）らの研究も、興味深い指針を与えてくれる。例えば、日本の音声指導では、一つの音に2～3の例を提示しながら学習を進めることが多い。/ei/の音についてのstation, brave, /k/の音はcap, musicのようにである。ScottらはHeilmanら（2008）の事例を更に初心者向けにアレンジ

することを提言する。例えば、表のような語彙リストを学習者に与え、step 1 からstep 4に進ませる中で、音声への発見と理解を促す方法である。まったく同じ綴り、同じ発音も、音素がひとつ加わることで、全く違う言葉になるという言葉遊びであるが、/s/とい音素をstation, skyと学習するだけよりも言語感覚は広がる。聞き取りの識別にも活用でき興味深い。小学生の英語テキストに出てくる単語を用いれば、6年生にも応用可能な指導法である。既述のように、小学校英語教育の現状課題として、(小学校で) 音声中心で学んだことが、中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていないことが指摘されている。小学校高学年段階での手厚いフォニックス指導は、音声と綴りの関係への気づきを助け、中学校での文字の学習に向けて有効な橋渡しになるのではと考える。

Step1: The following list will be given out to students.

<u>top</u>	<u>top</u>	<u>mile</u>	<u>mile</u>
<u>lid</u>	<u>lid</u>	<u>wing</u>	<u>wing</u>
<u>pot</u>	<u>pot</u>	<u>lick</u>	<u>lick</u>
<u>nap</u>	<u>nap</u>	<u>nail</u>	<u>nail</u>
<u>tar</u>	<u>tar</u>	<u>well</u>	<u>well</u>

Step2: students read the words in the first column.

Step3: Students put "s" in all the blank.

Step4: students will read the completed words.

表 語彙リスト

### 3. まとめ

本稿は、小学校での英語教育における音声指導を取り上げ、その有効な指導方法としてフォニックスに着目し、関連の文献を分析しながら、その有効性や可能性について検討した。

次期小学校学習指導要領「外国語活動」、「外国語」ともコミュニケーションを図る資質・能力を育成する基礎として、「音声に慣れ親しむ」ことや「音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的表現」を用いることを求めている。文献からは、発達段階に合わせた指導法を工夫すれば、小学校中学年での「外国語活動」、高学年での「外国語」ともに、フォニックス指導は有効と解釈できる。

英語学習の導入期に、フォニックスを使って、日本語と英語の音声の違いを識別でき、発音できるようになることは、その後の安定した習熟の助けになるだろう。自分で発音できる音は聞き取り易い。例え意味が分かっている、自分で発音できない音は、聞き取りも難しい。つまるところ、母語でない英語を出来るだけ正確に発音するには、まず英語の「音素」を耳で識別できることが重要である。音声を聞き取ること、そして、音素に意識しながら、ゆっくりでも良いからできるだけ正確に発音していくことで、音素の集合体で

ある音声に慣れ親しむことができる。音素を識別する, 正確に発音する, の両方にフォニックスは活用可能である。今後は, フォニックス指導の好事例を発掘し, 小学校の現場でも広く活用できるよう研究を進めていきたい。

#### 【参考文献】

- 太田かおり. 日本の英語科教育における音声指導の現状: 初期英語教育における音声指導の導入及びその教授法の確立を目指して. 社会文化研究所紀要 2012; 69: 53-73.
- 渋谷玉輝. 早期英語教育におけるフォニックス導入の可能性. 言語と文明 2011; 9: 113-123.
- 長谷川修治. 小学校英語教育における「歌・踊り・ゲーム」の研究. 植草学園大学研究紀要 2011; 3(59): 59-68.
- 樋口忠彦, 金森強, 國方太司 (編). これからの小学校英語—理論と実践—. 東京: 研究社; 2005.
- 文部科学省. 小学校学習指導要領「生きる力」第4章外国語活動(登録: 平成21年以前). 文部科学省ホームページ, <[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm)>, (参照: 2018年3月6日)
- 文部科学省. 小学校学習指導要領 平成29年3月. 文部科学省ホームページ, <[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afidfile/2017/05/12/1384661\\_4\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afidfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf)>, (参照: 2018年3月6日)
- 文部科学省. 小学校学習指導要領解説外国語編 (平成29年7月). 文部科学省ホームページ, <[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afidfile/2017/07/25/1387017\\_11\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afidfile/2017/07/25/1387017_11_1.pdf)>, (参照: 2018年3月6日)
- リーバーすみ子. アメリカの小学校ではこうやって英語を教えている. 径書房. 東京. 2010.
- 山見由紀子. 小学生へのフォニックス指導の有効性: 小学校5, 6年生へのフォニックス指導の実践 (アクションリサーチ). 中部地区英語教育学会紀要 45(0), 251-256, 2016.
- Abbott, M. Identifying reliable generalizations for spelling words: The importance of multilevel analysis. The Elementary School Journal 2000; 101(2), 233-245.
- DeKeyser, R., & Larson-Hall, J. What does the critical period in second language acquisition. In Kroll, J.F., & de Groot, A.M.B. (Eds.) Handbook of Bilingualism: Psycholinguistic Approaches. Pp88-108. New York: Oxford University Press. 2005.
- Heilman, A. W.(author), Matsuka, Y. (translation supervisor). フォニックス指導の実際 (Actual Teaching of Phonics). Tokyo: Tamagawa University. 2008.
- Penfield, W.; Roberts, L. Speech and Brain Mechanisms. Princeton: Princeton University Press. 1959.
- Piaget, J. Main trend in Psychology. London: George Allen & Unwill. 1973.
- Scott, K., & Hayase, M. Practical Application of CLT, TPR and Phonics Theories in Conjunction with Hi, friends! 1 and Hi, friends! 2 English Materials in Elementary School Classrooms. 三重大学教育学部研究紀要 2018; 69: 435-443.